

の子です。この刀を持っていきなさい。」

と母から言われて、かし子は父の刀を持って家を出ました。母は、妹の宮子みやこが生まれる前だったので、とても苦しそうでした。ふろしき包みをもつた祖母そぼと三人で家を出ました。

途中とちゆうの道路は、逃げる人々で混雑こんざつしていました。鉄砲てつぱうの音はげしく聞こえ、弾丸だんがんが人々の頭の上をとんでいきました。ふり返つてみると、お城のまわりに、まつ赤な火がみえました。その火の中から、逃げる人々を追いかけるように、お城の早鐘はやかねがひびいていました。おそろしい光景でした。

戦争は一カ月後に終わりました。武士の家で育つた母は、気持ちのしつかりした人でしたが、お産さんの後でからだが弱つていきました。そこに、あのおそろしい戦いを思い出させる鐘の音が、いらいらした神経しんけいにさわりまます。鐘が鳴るたびに、からだのふるえがとまらなくなり、薬くすりも食物もないまま、しばらくし